



Title	Keats and English Romanticism in Japan
Author(s)	岡田, 章子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49211
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 おか だ あき こ
岡 田 章 子

博士の専攻分野の名称 博 士（言語文化学）

学 位 記 番 号 第 2 1 6 1 7 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 19 年 10 月 31 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 Keats and English Romanticism in Japan
(日本におけるキーツとイギリス・ロマン派の研究)論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 木村 茂雄(副査)
教 授 伊勢 芳夫 准教授 小口 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本書は明治初期にイギリス・ロマン派の詩が日本に紹介されてから、その近代化と共に日本の土壌に根を下ろし、受容された過程を概観するものである。特にキーツを中心に日本の読者にいかに愛好され、研究されているかを考察し、欧米の読者に広く知らせることが狙いである。ロマン派の詩は当初から現在に至るまで広く研究されているにもかかわらず、大部分の文献は日本語で書かれているため、その研究はほとんど海外に知られていない。また国内で我が国の研究を論じたものは幾つかの論文があるのみで単行本はない。日本におけるロマン派研究の実態と具体的な業績を海外に伝えることを目的とする。

日本は200年余にわたる鎖国を解き明治維新を経て近代化を歩み始めた1860年代から国際社会の仲間入りをした。この頃英国はヴィクトリア朝の繁栄期で、その国力のためと英語の普遍性のために、日本は教育・軍事・社会生活全般にわたって英国を模範とした。アメリカ合衆国も基本的に英国と同じ文化圏と考えられ、両国は日本の近代化の目標のひとつとなった。1880年代になって欧米の民主主義が取り入れられると、人の平等が強く主張され、生まれや地位による差別なく、勤勉が国家と個人の繁栄の基本であると考えられた。この背景のもと、欧米文化が日本の近代化に重要な意味をもった。

この風潮は文学にも影響を及ぼした。日本には1000年以上の詩の伝統があるが、英文学が紹介されるや、すぐさま日本文学の中に融合された。1882年に出された『新体詩抄』はその先駆である。伝統的な和歌や俳句では表現しきれなかった新しい感情が歌われた。14篇の訳詩と5篇の日本の詩が編纂され、形式の上でも内容の上でも外国文学と日本文学の融合を示すもので、日本詩歌の伝統に新しい空気を吹き込んだ。『新体詩抄』にはロマン派の詩は含まれていないが、後の『文学界』を中心とするロマン派受容の基盤となった。ロマン主義は日本の近代化と平行して受け入れられ進展していった。

本書は2部に分かれ、第1部では戦前・戦後のロマン派受容の軌跡をたどり、ワーズワス・コールリッジ・バイロン・シェリー・キーツの5詩人が時代と共にその受容にどのような変遷があり、欧米の研究が日本の研究にどのような影響を及ぼしたかを代表的な著書を具体的に紹介しながら検討する。5詩人の中で最も人気のあったのはワーズワスとキーツであるが、そのうちキーツに焦点を絞り、その研究の流れを詳細に考察する。さらに範囲をせばめてキーツの詩の翻訳を取り上げ、初期の創作的な訳から最近の原文に忠実な訳に至る変遷を検討する。第2部では視点を日本におけるロマン派及びキーツの受容からひとりの読者からみたキーツへと転じ、彼の詩がいかに心を捉えるかを論じる。

第1部で取り上げるのはロマン派詩人受容の歴史である。まずワーズワスが人気を集めた。その自然詩が日本人の

心に親しみやすかったからで、彼の詩は明治期の多くの詩に模倣され、その詩論は日本の詩論に移入された。ワーズワスの『抒情民謡集』の序文で宣言された新しい詩の時代の到来は島崎藤村の『若菜集』の序で近代詩の夜明けを告げた。1900 年頃までのワーズワスに対する情熱は「ワーズワス熱」と呼ばれたが、それは大正デモクラシーの到来と共に政治的な意味の深いバイロンやシェリーへの情熱に移って行った。特にバイロンへの崇拝は「バイロン熱」と呼ばれたが、あまり洗練されたものではなく、バイロンの文学を深くは理解しない表面的なものであった。しかしバイロンの情熱的な人生や自由の渴望は大正デモクラシーの雰囲気の中で人々の心を引きつけ、彼の伝記が書かれ作品が翻案された。シェリーもまたその自由の概念が賛同され、日本文学の中に引用された。キーツへの愛好は日本の政治的動向には左右されなかったが、時代と共に次第に注目を浴び模倣された。コールリッジは他の詩人のように奔放な人生や物語の魅力や近づきやすい詩が少ないこと等から注目されるのが遅れた。全体にロマン派への愛好はより広がっていったが、研究レベルではまだ低く欧米の研究の模倣にとどまったが、戦前の研究者は日本文学の造詣が深くその研究の中に日本の詩歌に言及しているのは意義深い。この時期の外人教師の活躍も見逃せない。第二次大戦及びその後 20 年ほどは学究的な研究は少なく戦前の名残の感があったが、5 詩人の受容にも変化が見られた。大正デモクラシー時代のバイロン・シェリーへの熱狂は消えた。T.S. Eliot の低い評価も影響してシェリーの人気は下火となり、バイロンも何故か低迷した。1970 年以降は科学的近代的な研究が開いた。出版物もふえ、単なる欧米の研究の模倣や単純な翻案の域は脱した。中にはシェリーの手稿を編纂・分析して世界的な評価を受けた業績もある。1975 年のロマン派学会創立は一層研究を進展させ、海外との交流も多くなった。国際学会への参加も容易になり、それをきっかけに日本シェリー研究センターや日本バイロン協会が誕生した。

次にキーツに絞り、始めて彼の名が日本の文献に登場した 1871 年から現代に至るまでの経緯を追う。最初の記載は Samuel Smiles の *Self-Help* が『西国立志篇』の書名で中村正直によって訳された本の中で「其子ハ売薬商ノ子ナリ」として(誤って)紹介されたものである。それ以降しばらくは断片的に英文学史や百科事典などに名前が散見される程度であったが、1890 年代から『文学界』の同人を中心に広く愛好されるようになった。初期の代表的な愛好者は平田禿木、蒲原有明らで前者は『文学界』に 6 ページほどの「薄命記」を書いてキーツが身分の低い生まれながら天才詩人として名声を得たと讃え、これは明治期の立身出世の風潮の中で人々に受け入れられた。このキーツ観は長く日本の読者に定着した。後者は“Bright Star”のソネットの美しい日本語訳を『独弦哀歌』に所収して評価を得た。近代日本詩人の中で最もキーツを崇拝したのは薄田泣菫で新しい詩形式である「賦」や「絶句」を彼から学び、内容も模倣した。研究書では佐藤清著『キーツの芸術』(1924)や斉藤勇著 *Keats' View of Poetry* (1929) が金字塔である。特に斉藤勇はそれまでの感傷的なキーツ像から脱して人道的詩人としてのキーツ像を描き出し、キーツ研究を大きく前進させた。終戦直後の混乱を挟んで、ニュー・クリティシズムの影響を受け、さらに最近のニュー・ヒストリシズムの理論も取り入れて、テーマの捉えかたも多様になったが、まだ欧米の研究を何年か遅れて追従する面もあり、真に日本のキーツ研究が国際的貢献をするには日本読者としての観点からさらに深い研究をすることが必要である。

初期のキーツ詩の受容で大きな役割を果たしたのは翻訳である。キーツに関する最初の単行本は田山花袋訳『キーツの詩』である。当時翻訳は主として文人によって担われたので熱烈な愛好者ではあったが、語学力の不足や詩論の理解不足から拙いものも多く、この本も誤訳の多いのが指摘された。概ね当時の文人の訳は原詩の意味を忠実に伝えるよりは日本の感覚で受け止めてそれを移植するという考え方であった。これと対照的に最近の翻訳は主として研究者によってなされるので研究対象として考えられ、原文の意味を忠実に移そうとするため、多くの注がつけられ明治期の訳のような味わいが失われる場合もあった。1974 年には出口保夫によりキーツの全詩の口語訳が出された。田山花袋の『キーツの詩』出版から約 70 年である。

第 2 部ではこれほど愛好されたキーツの魅力の一端を探る。その第一の関心は医学の教育を受けたキーツである。日本文学の伝統にも医師でありながら詩人であって両分野で優れ、知性を代表すると尊敬された人々がある。その点からもキーツに親しみを覚えるにもかかわらず、何故か日本には医師としてのキーツに関する研究が少ないのは残念である。彼は 6 年間医学を学び、それは詩人としての年数とほぼ同じである。その間彼の直面した厳しい現実が彼の人生観にも広がりをもたせ、その用語やイメージにも反映される。彼が常に追求した「世界に役立つことをしたい」という理想は詩の中に医学と文学の調和をもたらしものである。初期の詩からオードや「ハイペリオン没落」に至るまで医学の体験に由来すると思われる表現や詩想を分析する。第二に彼の現実的な医療の世界と対照的な魅力が魔法や妖精、神話などの超自然の世界である。特に「レイミア」や「つれなき妖女」の女主人公は魔女であり妖精であ

り、人間と非人間との恋が歌われる。「聖アグネス祭前夜」では登場人物は人間であるがその中世ロマンスの背景はキーツの豊かな想像から生まれた超自然の世界で物語の中に読者を誘う働きをする。日本文学にも超自然現象が人間世界に繰り広げる神話や民話の伝統があるが、キーツの描く鮮やかなレイミアの変身や神秘的なつれなき妖女は簡素な日本の民話や超自然現象とよい対比となり、日本の読者にとってあこがれである。もうひとつキーツの詩で特徴ある魅力をもつのはその凝縮した具体性に富んだ言葉使いである。「聖アグネス祭前夜」の美しさのひとつはそれが描かれる含蓄のある用語によって作り出される。冒頭、厳冬の深夜に祈祷僧を登場させ、続いて視点を城の外から中へと移し、そこで聖アグネス祭の伝説の枠組みの中で恋人達が愛を成就し、妖精の国から吹いてくる風によって見知らぬ世界へと飛び立って行く。この魔法漂う空想の世界を現実根を下ろした具体性のある用語で描いて読者を魅了する。これら三点——医師としてのキーツ、超自然の美、優れた言葉使い——はそれぞれ異なった角度から彼の詩の美しさを呈示するものであるが、相互に関連をもちながら彼の詩の世界を繰り広げる。

この本はキーツを中心とするロマン派詩人の 120 年余に及ぶ受容の概観と、キーツの魅力をいかに読み取るかの両面から、日本の研究の現状を欧米の読者に知らせ、それによって日本のロマン派研究が国際的に貢献できるようになることが狙いである。

最後に補遺として私が 1993 年にキーツが医学を学んだガイズ病院（ロンドンに現存する）を訪れた時の個人的な印象記を付している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近現代の日本におけるイギリス・ロマン主義詩の受容を 2 部構成で論じたものである。第 1 部は明治初期から現代までの受容史を詳説し、第 2 部では日本人読者としての観点からロマン派詩人 John Keats の詩を分析し、受容の具体例を提示している。日本における英学史研究の中でも、ロマン派に焦点をあてた本格的な研究はこれまでに存在せず、本論文は貴重な学術的貢献と言える。

第 1 部の第 1 章と第 2 章は、5 人の主要なロマン派詩人 Wordsworth、Coleridge、Shelley、Byron、Keats の明治以降の受容史である。『文学界』にはじまり、鴎外、透谷、漱石などもかかわった初期の受容は伝記、翻案、自由訳、文学論の導入などにより、これらの詩人を日本文学に移入することを中心とした。この受容形態が学術的研究と、原文を尊重した翻訳という現代的な形へと移行していく過程が、多くの一次資料に基づきつつ説得力豊かに実証されている。また、富国强兵や大正デモクラシーなど時代思潮の推移にともない、注目される詩人が移り変わっていく過程の論証も興味深い。

第 3 章は日本におけるキーツの研究史であり、斎藤勇や日夏耿之介らが確立した日本独自のキーツ研究が、近年の国際的な水準の研究へと発展する過程を論証している。第 4 章は、キーツ作品の翻訳史を扱う。初期の翻訳は田山花袋らによる自由訳であったが、戦後は正確さに重きを置いた学術的翻訳が主流となり、それは 1974 年の全詩集訳、2003 年の長編詩 *Endymion* の新訳に結実する。最初期から現代にいたる主要な訳業の内容を検討し、その特徴や問題点を指摘している点で、本章は高く評価できる。

第 2 部にあたる第 5 章、6 章、7 章は、キーツの詩の批評的分析である。第 5 章は文人医学者という日本的伝統を受け、キーツの医学的側面を考察する。彼が受けた医学教育を考察し、作品中の医学用語やイメージを分析したうえで、「人類の医師としての詩人」というキーツの詩論に結びつけている。個々の分析に卓見の見られる、興味深い章である。第 6 章ではキーツが描く魔法や妖精を日本の伝承物語と比較し、超自然的現象に対する両者の態度の差異を分析する。第 7 章は物語詩 “The Eve of St. Agnes” を論じ、複雑な感情や態度を表出することばの用法を明らかにしている。第 2 部は先行研究を十分に咀嚼した、独自の学術的貢献として評価できる。

以上のように、本論文は優れた独創性を認めうる研究である。文学理論や領域横断的な研究動向が扱いきれていないこと、また第 1 部と第 2 部の有機的連関の説明が充分には尽くされていないといった問題はあるものの、それは着実な資料的裏付けをもって、未踏の分野を開拓した本論文の学術的価値を損なうものではない。よって本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと判断する。